

# 関場不二彦の未発表原稿「西医学東漸史話補遺」について

はじめに

秦<sup>1)</sup> 温信、島田 保久<sup>2)</sup>  
 長瀬 清、鮫島 夏樹<sup>3)</sup>  
 夏樹<sup>4)</sup>

「西医学東漸史話」は上・下巻が昭和八年一月二十一日、余譚が昭和八年六月十一日に東京本郷の吐鳳堂書店より出版されている。これは上巻・下巻・余譚をあわせ合計一三一九頁にもおよぶ大著であるが、西洋の医学が東漸して日本に入り発達していったことを外科の領域から記述したものである〔写真1〕。「日本医史学」の著者である富士川 游が、その名は史話と称すと雖も一個の立派なる医史学的著述として空前のものである」と絶賛している。これについては共同著者島田らが平成六年に氏が入手した仮製本と共に紹介した。その後著者らは本書の著述に至った動機などについても検討し報告してきた。

北海道道立図書館に所蔵されている「関場理堂資料」の中に「西医学東漸史話補遺」なる原稿を発見した(写真2 a・b)。これは昭和九年六月に記述されたものであるが、いまだ公表されていないと思われるのでその全文を紹介する。

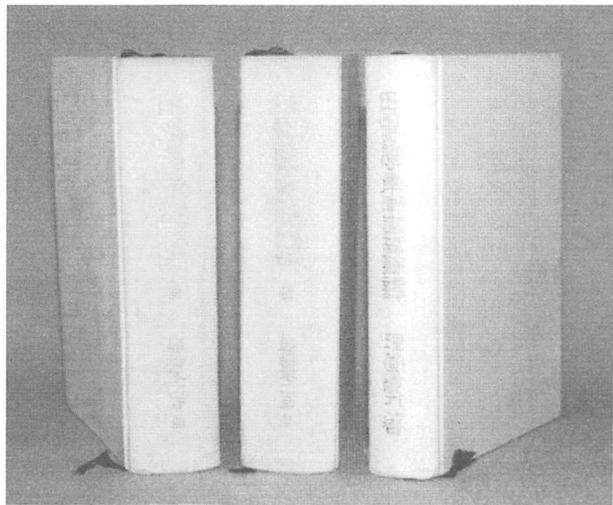


写真1 「西医学東漸史話」上・下巻・余譚

## 西醫學 東漸 史話補遺

前年編述した西醫學東漸史話及、餘譚には素より筆の及ばぬものが多かった。且又其先哲の偉業を記するに當り見聞及ばずして逸した事柄も同様である。此「及ばぬ」、「逸する」

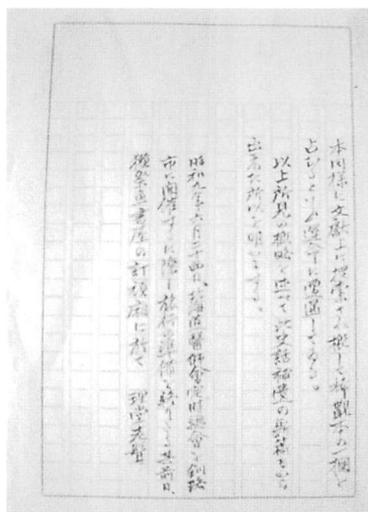


写真 2b 「西医学東漸史話補遺」最終頁

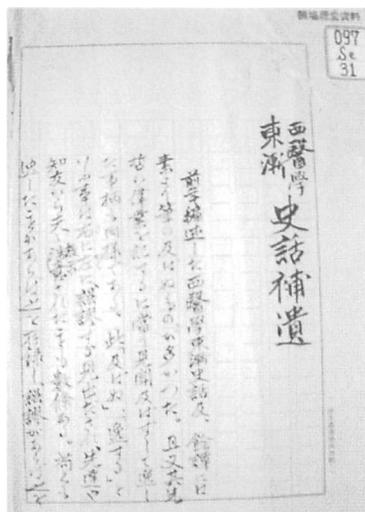


写真 2a 「西医学東漸史話補遺」初頁

といふ事は右に左に、誤謬すら見出され、先達や知友から夫々教示されたことも数條ある。苟くも逸したことがあらば之を存録し、誤謬があらば之を訂正するといふことは我が覺寤すべき事である。若し然せざれば先哲の偉業に對して敬意を失ふこととなり、或は事に由りては千年の史眼を誤らしむることとなつて重大とも思惟される。於是、再び管を搦つて小品、斷篇を厭はず、前冊の補遺を試みた次第である。但、爰に一言することは自ら親しく先哲の遺著、譯本を讀過涉獵した上の事であつて目を長くするも其銳を期し、耳を飛ばすも其聰を慮ばかり、決して他の鈔録や抜書などに據ることを戒めた事である。而して之に伴なふ苦心は先哲遺著の蒐集にあるが今日之を古書舖に獲るに甚難い事は亦尋常一様でない。

惟ふに當代の前哲を出自した家門は二百年、一百年後の今日に綿々として其裔孫を存するのであらう。然し中には其直系は斷絶し或は存するものも傍系又は姻縁の末葉となつて靡微其血を傳へざるものを多しとする。即、堂々猶祖先の業を守り以て名を成すものも晨星尙ならずである。是等前哲が蘭醫學の傳道に勉めたとしても其醫業に關する著譯本の多數は寧ろ家傳秘書といふ往年昔來の舊習に捉らはれ、栗崎、吉田、村山の諸流を始とし嵐山、桂川、檜林諸家に及んでも猶、皆此色彩を以て秘密扱ひにした。唯、其門人は塾則を遵奉した天地神明に誓ひ死を以て守り業を傳ふる子孫にのみ委讓されたのである。子孫にして傳へされば必、之を師匠の家に返納す

るといふ規約も與に締結せられた。此故に傳へられたものは素より皆寫本である。於是、許多の星霜中、師弟の家柄の盛衰興敗に伴なひ、傳授本は散逸し湮滅したものは亦決して尠なくなかつたと想像する。如是が故に前記諸流の傳授本は今日、完本として藏せらるゝは僅に十種内外と思ふ。

西醫學に關しての刊行本としては先、指を明和六年<sup>一七</sup>の外科訓蒙図彙に屈する。是は檜林家で傳へた「紅毛外科宗傳」の寫本の一部分を伊良子光頭が其自家に傳はつたものとして刊行したものである。之に次で杉田玄白の解體新書初版が安永三年中秋<sup>七四</sup>に出版された。即、前者に比すれば五年の後で、西醫學著譯本の上梓された嚆矢と言ふべきである。

爾来 天明、寛政より文化、文政に及び、尋で天保、弘化、嘉永に入り江戸、京阪を中心として醫學の諸科中、外科を主とし他の科と相前後して諸哲前から當時漢医家の壓迫に係はず苦を凌ぎ難を排し、陸續出刊さるゝに至つた。然し前哲苦心の譯本類は明治の初年には無用の廢物視され反古同様に始末されたが、今日の盛世に及んでは往年の寫本同様に文獻上に搜索され概して稀觀本の一欄を占むるといふ運命に遭遇してゐる。

以上所見の概略を述べて此史話補遺の斷篇ながら出来た所以を明かにする。

昭和九年六月二十四日、北海道醫師會定時總會を釧路市に開催するに際し旅行の準備を終りたる其前日、瀬祭魚書屋の訂頑廂に於て

理堂老髯

おわりに

関場は「西医学東漸史話」の著作に当たつて引用している著書はすべて入手し、確認する作業から始めているが、それを古書店で探しあてるのは容易でなかつたことが述べられている。さらに西医学の著訳本の入手が困難な理由として先哲が漢医家の圧迫にもかかわらず苦心して記された訳本が明治の初年には無用の廢物として捨てられたことをあげているが、当時の明治政府における担当者の見識のなさに憤慨していると推量するものである。

稿を終えるにあたり、ご教示いただいた書家後藤參鷗氏に深甚なる感謝の意を表する。

#### 参考文献

- (1) 島田保久、津田晴美、牧田憲太郎、片岡是充、遠藤正之、吉田 信『関場不二彦著「西医学東漸史話」について』、『第十九回札幌市医師会医学雑誌』二五—二七頁、一九九四
- (2) 秦 温信、松岡伸一、関谷千尋、佐野文男、島田保久、吉田 信『関場不二彦の医学史研究の端緒および「西医学東漸史話」の著述の動機について』、『北辰』第三号、二五—三一頁、二〇〇〇

<sup>1)</sup> (札幌社会保険総合病院、島田外科整形外科医院)  
<sup>2)</sup> (長瀬内科医院、旭川医科大学(名誉教授))